

権の倍額の債務を抱えることになり、後継政権の課題となっている。また著者は、諸々の政策が経済成長と市場機能向上をめざしたものだ」と指摘するが、これは新自由主義の特徴とは言えない。たしかに特定産業の育成に政府がテコ入れするのではなく、「環境整備」を重視した点は新自由主義的と評価できるが、前代未聞の規模の公共投資、民営化事業の見直し、第3章で論じられる社会政策の充実化などを考慮すれば、新自由主義とは異なる政策志向もドゥテルテ政権の大きな特徴だったと考えられるのではないだろうか。

第3は、統治能力の評価についてである。本書はドゥテルテが大統領選に当選したのもっとも重要な要因が、統治能力の改善を期待された点にあったとしている。したがって、この点のパフォーマンスは政権への支持を大きく左右するはずである。ドゥテルテ政権期における統治能力の変化を考察した箇所、著者は「ごくわずかな改善がみられるものの、それほど統治の質が上がっているわけではない」(p.26)と評価している。そうだとすれば、なぜ有権者の多くが政権終了までドゥテルテを支持し続けたのかという根本的な疑問が生じる。本書はこの問題に答えていない。著者はドゥテルテに期待された統治能力改善の具体的な内容が、秩序の確立、治安の改善にあったとしているにもかかわらず、統治能力を論じる箇所での核心的な論点にふれていない。実際には、ドゥテルテ政権期に窃盗や強盗といった犯罪の件数が大幅に減少した。こうした変化は、国民から統治能力の大きな改善として実感されたのではないだろうか。本書は、ドゥテルテ政権を成立させた核心的問題が6年間でどのように展開したのかをほとんど議論していないのである。

(原 民樹・早稲田大学アジア太平洋研究センター)

参考文献

Kreuzer, Peter. 2020. *A Patron-Strongman Who Delivers: Explaining Enduring Public Support for President Duterte in the Philippines*. PRIF Reports, 1. Frankfurt am Main: Hessische Stiftung Friedens- und Konfliktforschung. <https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:0168-ss0ar-69009-8>, (accessed May

10, 2024).

池端雪浦. 『フィリピン革命の研究』 山川出版社, 2022, 441+57p.

スペイン植民地からの独立を求めて1896年に始まり、1899年に共和国の樹立を宣言するに至ったフィリピン革命は、フィリピン国民国家の「原点」として、フィリピン史研究の最も重要なテーマの一つであり続けている。革命に先立つ19世紀後半の知識人の民族主義運動、革命を率いた結社カティプーナンの活動や革命闘争の展開、カトリシズムに根ざした民衆思想と革命の関わりといった研究の蓄積に加えて、近年では、フィリピン各地の中間的階層が革命で果たした役割やフィリピン内外の知的状況と改革運動・独立闘争の関係といった観点からの研究が進展するなかで、フィリピン革命像は19世紀の世界史・アジア史と国民国家フィリピンの成り立ちという双方向から再検討され、より精緻で豊かになりつつある。¹⁾

フィリピン革命研究がこのように発展を見せるなか、本書は、著者が約50年にわたり取り組んできた研究課題であるフィリピン革命をあらためて「総合的に検討する」ために、自身が発表した9編の論考を選び、編集したものである。本書は「総合的に」という目的にふさわしく、19世紀フィリピン社会の変容、その社会を生きた人々の営みと思索、そこに構築されたスペイン植民地支配に対する抵抗思想と民族思想、それらが「革命という時代のうねり」に収斂する様を描き出す大作である。

本書の構成は次の通りである。

序 (革命の概要・本書の課題と構成)
第一章 「マニラ開港と商品経済の進展」
第二章 「スペイン体制下の現地人官僚制度」

1) 革命における中間的階層の役割については、Richardson [2013], Cullinane [2014], Guerrero [2015] など。国際的な思想・運動と革命の関わりについては、アンダーソン [2012], Aboitiz [2020] など。近年のフィリピン政治学研究の進展をまとめた高木 [2018] は革命期の研究についても触れており、参考になる。

- 第三章「民衆カトリシズムの抵抗」
- 第四章「民族思想の創出とプロパガンダ運動」
- 第五章「フィリピン革命の展開」
- 第六章「フィリピン国民国家の原風景」
- 第七章「単一国家と連邦制」
- 第八章「フィリピン革命と日本の関与」
- 第九章「明治期日本のフィリピンへの関心」

以下では、本書の記述に沿ってフィリピン革命像をたどったうえで、近年の研究を踏まえて、本書が提示する論点について述べたい。

1834年のマニラ開港を契機として、フィリピンでは輸出農産物の生産に特化したプランテーション形成が進み、農民が大多数を占める住民社会は外国貿易に依存する商品経済へ転換し、旧来の自給自足的な村落経済体制から資本主義経済へ急速に変化していった(第1章)。一方18世紀末以降フィリピンの官僚制度は、商品農業の進展を背景とする官僚制度の拡大・近代化にともない、現地住民の登用を増やした。それにより、植民地前にルーツを持つ伝統的支配層が独占してきたプエブロ(植民地統治の基礎的な行政単位)の官職(プリンシパリア)に、新興の有産階級、とりわけ中国系メスティーソが参画し、社会的地位と政治的支配力を獲得した。プエブロ社会に強大な影響力を持つ有産階級には官職を忌避する者も出て来て、植民地政府の権威と権力は喪失されつつあった(第2章)。

この時期タヤバス州では、資本主義経済への変化のなかで困窮し、中国系メスティーソの進出で相対的被奪感を深めた民衆が、天国への救済を求めて聖ヨセフ兄弟会の運動(1832-41)に参加した(第3章)。聖ヨセフ兄弟会の会員は、祈りに徹した生活を送ることで貧しい者も天国へ至るという会の教えに従って活動したが、その教えはカトリック教会が教導する信仰生活に対抗する性質を有したために当局による弾圧を招いた。会の指導者はキリスト受難詩パシオンを参照して、弾圧を神が下した試練ととらえ、この「終末時の戦い」に勝利して天国へ至るという「黙示録の預言」で会員を鼓舞した。「植民地支配の正統性原理としてもたらされたカトリシズム」は、不当な支配を乗

り超えるための「論理とことば」を民衆に提供するという逆説的機能を持つに至ったのである。

一方、19世紀に台頭した新興有産階級からはマニラやスペインで高等教育を受けた知識人が生まれ、1880年代初頭、スペインへの留学生がフィリピン問題をスペイン社会へ浸透させる言論活動(プロパガンダ運動)を開始した(第4章)。マニラ周辺ではマルセロ・H・デル・ピラルがプリンシパリア層を組織して、プエブロ行政から修道会の力を排除する改革運動を主導し、さらに亡命先スペインでプロパガンダ運動に合流して、フィリピン人の法的平等など自由主義の論理に基づく植民地の改革とスペインへの同化を主張した。一方、この運動のもう一人の中心的人物であったホセ・リサルは、フィリピン統治の不正や修道会の圧制を描いた小説『ノリ・メ・タンヘレ』(1887)のほか評論などの著述を通して植民地支配を「民族全体」の「共通の不幸」と認識して、スペインから分離するという選択肢を提示した。しかしながら、スペイン語で提示された自由主義的な変革思想は民衆の思考とはかけ離れていた点に限界があった。

このような抵抗・変革運動の先に展開されたのがフィリピン革命である。本書は、1896年8月のカティブナーンの蜂起から独立宣言直前の1898年4月までのリーダーシップのあり方に着目する(第5章)。カティブナーンは、マニラの労働者階級を中心に1892年に結成され、民衆重視の人間観に立って階級社会を否定し、階層の違いを超えて対等の立場で植民地権力打倒を目指した「都市急進主義」的性格の結社である。一方、会が周辺諸州や地方へ進出する際には、住民統治能力に優れた各地のプリンシパリア階層がまず入会して支部を結成し、彼らの働きかけで農民が入会することが多かった。革命闘争の指導権は、蜂起直後の短期間はカティブナーン総裁ボニファシオを中心とするマニラの指導部が握ったが、ほどなくしてアギナルドを中心とするカビテ州のプリンシパリアに奪取され、彼らを中心に革命勢力の結集が進められた。しかし、各地で有力なプリンシパリアがプエブロの住民を率いてカティブナーンの名の下に自律的な闘争を展開しており、1897年にアギナルド指導部がスペインと和平協定を締結して

以後も、革命の完徹を求めて闘いを継続したため、1898年頃には革命闘争は開始時より拡大し、「アナーキーな革命状況」が出現した (p. 291)。この期間を通して、「民族革命をめざす闘争主体を民族的規模で形成することと、それを率いる民族的リーダーシップの創出」は果たされなかったと著者は指摘する (p. 287)。

ボニファシオらは、プロバガンダ運動が追求した自由主義の論理に基づいて改革ではなく革命を課題と定め、その革命思想を民衆カトリシズムの論理で再構成し、民衆カトリシズムに根差す人間愛を絆とする万人平等の世界を求めたが、フィリピン人自身の間の身分差別の解決を目指すこの平等思想は、プリンシパリア階層の利害とは相いれなかった。革命の指導権がマニラのカティブナン指導部からプリンシパリアに移ったことは、思想の問題としては、土着の変革思想が制度としての共和主義を追求する西欧伝来の自由主義的変革思想に敗北したことを意味すると著者は述べる。それでもなお、カティブナンが掲げた革命思想は、その後も長く民衆を鼓舞し、革命勢力結集のシンボルとして生き続けた。

それでは、スペイン植民地から「フィリピン共和国」という国民国家を創出するにあたり、「フィリピン国民」はどのようなものとして構想されたのか (第6章)。リサールの思想的営為を追うと、フィリピン国民とは祖国フィリピンの風土と社会への愛や植民地支配の痛み・悲しみへの共感によって規定されるもの、すなわち血の論理ではなく政治的立場や道徳的立場によって規定されるという国民観が見出される。また祖国とは、自身を育んだ故郷の風土と文化に重なるものであり、それゆえ人間の本源的な愛着の対象であると同時に、死後も人間が永続的につなぎとめられる場と観念される。この概念に基づけば、フィリピン国民にはメスティーソもフィリピン生まれのスペイン人も内包される可能性があり、メスティーソであるリサール自身の民族的アイデンティティも植民地支配の悲しみへの共感という「自覚的判断」に依拠するものであった。ただし、リサールが祖国と思い定めたスペイン植民地の領域は、地図上の領域と現実に植民地支配が及んでいた地域が一致し

ておらず、リサールの思索においても未検討のまま残された。

一方共和国のあるべき国家形態については、革命期にはさまざまな利害と思想を背景とする国家像がせめぎ合っていた (第7章)。アギナルドラルソン島の革命勢力は、1898年6月に独立を宣言して革命政府を樹立し、フィリピン諸島の住民全体を統合して単一共和国体制を建設しようとしていたが、ビサヤ地域バナイ島では、1898年11月に在地エリートが結集してビサヤ・ミンダナオ暫定革命政府を設立し、12月にはビサヤ連邦州政府を名乗った。輸出経済で繁栄するイロイロ州を地盤とする同政府は「ルソン・ビサヤ・ミンダナオ連邦共和国」という連邦制国家の設立と、徴税・財政制度などに関する地方の自立性を認めることを主張した。さらにイロイロ州のエリートは、自分たちが中心となってビサヤ地域全体の統合をはかろうとしたが、隣島ネグロスのエリートもネグロスの自立性を主張し、対抗した。アギナルドのブレインであったマビニは、ルソン以外の島々や非カトリック社会の多様な政治文化を包摂するには連邦制が合理的であると認識していたが、革命に勝利するまでは単一共和国体制に従うよう要請せざるを得なかった。

このフィリピン革命の推移に、日清戦争後の日本政府および軍部は南方への勢力扶植の観点から関心を持ち、関与を試みた (第8章)。条約改正・大陸進出などの外交課題を抱える日本政府は、列強との協調外交を維持するために革命には中立・不介入の方針を採ったが、米西戦争の気配が濃厚になると、軍部はアメリカによるフィリピン占領を阻止するために革命軍に挺入れ工作を試みる一方、1898年8月にアメリカがマニラを占領すると、日本政府は権益拡大のためにフィリピン共同統治案をアメリカに提案するなどした。フィリピン側では、日清戦争を契機に日本の独立支援に対する期待が高まり、米西戦争勃発後は日本からの武器払下げを求めて対日交渉を活発化させたが、その期待と日本の関心は本質的に交わるものではなく、支援は実現しなかった。他方、日本のメディアに見られるフィリピンへの関心は、一貫して日本の国利国益にあった (第9章)。フィリピン革命開始

以前には、フィリピンに関する言論は日本の南洋進出に関心を持つ論者に担われ、通商貿易、植民、日本の南辺防備といった観点からのフィリピン進出論に関心が寄せられた。革命が始まると、フィリピン情報の発信は新聞による革命の戦況報道が主となり、革命運動に好意的な報道あるいはフィリピン住民の生活などについての報道もなされたが、アメリカの優勢が確実になると報道は日本とフィリピンの経済関係に収斂していった。

このような革命像を踏まえて、以下では、革命の指導権およびリサールの国民概念についての本書の議論を検討する。

近年のフィリピン研究では、革命闘争を主導したのは中間的階層であり、カティブーナンのみならず無学な民衆ではなかったことが論じられている。革命の指導権を担ったのは誰かというこの問いについて、本書は、革命初期を除いて地方の「一般のプリンシパリア」が担ったと論じる。19世紀後半にフィリピンでは、中等教育機関で学ぶ現地人が増加し、プリンシパリアの中の教育ある層としてプエブロのエリート層を形成した。著者によれば、プリンシパリアは一般のプリンシパリアと上層のプリンシパリアに分かれる。上層のプリンシパリアは大規模土地所有層で、マニラの大学を卒業してヨーロッパに留学するなど最上層の知識層となった。彼らは経済活動や高等教育、堪能なスペイン語を通じて他地域のプリンシパリア層とも交流があり、プエブロを動かす政治力に加えて、他の町にも影響力を持っていた。プロバガンダ運動を開始したのはこのような上層プリンシパリアであったが、1896年8月の革命勃発から98年4月までは彼らの革命参加はほとんどなかった。対して一般のプリンシパリアは、植民地体制の地方官吏としてプエブロの住民を統率する政治的技術と支配力を身に付けており、その能力により民衆を組織して革命闘争を展開した。しかし彼らの活動圏は居住する町社会にとどまり、他の町や州の住民を統率する力は持たなかったという。これを背景として、群雄割拠するがごとくプリンシパリアが各地で住民を率いて自律的な闘争を繰り広げたことで、革命運動全体を統率するリーダーシップの形成は困難を極めた。

一方著者によれば、カティブーナンの中央指導部を構成した人々の社会階層は、そのようなプリンシパリアとも一般民衆とも規定しがたい。首都マニラの階層構成は、上下プリンシパリアと民衆という三階層から成る地方社会より複雑であることに加えて、教養を身につける多様な機会があるため経済力と教養レベルは必ずしも相関せず、たとえばボンファシオは経済的には下層でありながら、知識は大学卒業生に劣らなかつたとされる。また、カティブーナンの思想における民衆イメージは、「頼るべき主人もなく、時間に拘束されて働く都市労働者」を基礎にしていたことは否定しがたいという (p. 229)。革命のリーダーシップをこのようにたどると、1899年にフィリピン共和国が樹立された時には、目指すべき国家のあり方もまだ定まっていなかったと言えるだろう。

同様に、フィリピン国民という意識の獲得も革命期には一部の知識階層にとどまっていたと考えられる。リサールの国民概念は、フィリピンの自然と社会への愛やフィリピンの正義への共感といった感性や政治的立場によって「線引き」され、植民地支配の痛みに共感して共に戦う人々という動的なものであることが特徴とされる。政治的立場を重視するリサールの思想には自由主義の要素が指摘されるが [Claudio 2018]、スペイン語で語られた自由主義思想は民衆の思考とはかけ離れていたと著者は見ている。これを民衆カトリシズムの論理に基づく変革思想に翻訳したのがカティブーナンの思想であるが、それは救済の思想とも言え、革命成就後に共有されるべき国民概念としてはまだ漠然としていたと言わざるを得ない。国民意識の形成という観点からは、本書が取り上げていない知識人の知的営為が果たした役割も大きかった一方 [Mojares 2006]、国民国家の文化的ルーツという観点からは、「スペイン化されたカトリック町村社会」のあり方のさらなる解明も必要だと考えられる [Ileto 2021]。

最後に、リサールの国民概念と「メスティーツ」の関係について触れたい。著者は、1880年代から台頭したフィリピン・ナショナリズムは「メスティーツを主力とするナショナリズム」であったと述べる (p. 293)。リサールの国民概念は血の論

理によらないものであり、またリサールが思い描く祖国の情景や文化も、自身を育んだ植民地の「メスティーソ文化」が無意識のうちに前提されたという。一方第3章で取り上げた聖ヨセフ兄弟会は、貧しい人々の救霊という目的に対応して、メスティーソの入会を禁止していた。ここからメスティーソも含む国民概念が広く定着するまでには、大きな隔たりがあるように思われる。すなわち、国民概念はいつ頃、どのようにして民衆レベルにまで浸透したのか、それはどのような内容のものだったのかという問いは、あらためて意味を持つのではないだろうか。

以上のように、本書はフィリピン革命の総合的な研究であると同時に、まさに「革命という時代のうねり」に至る19世紀フィリピンの「通史」でもあり、そこからさらに多くの研究課題が着想されうる見事な作品であると思う。

(内山史子・都留文科大教養学部)

参考文献

- Aboitiz, Nicole C. 2020. *Asian Place, Filipino Nation: A Global Intellectual History of the Philippine Revolution, 1887–1912*. New York: Columbia University Press.
- アンダーソン, B. 2012. 『三つの旗のもとに——アナーキズムと反植民地主義的想像力』山本信人(訳). 東京: NTT出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London: Verso.)
- Claudio, Lisandro E. 2018. *Jose Rizal: Liberalism and the Paradox of Coloniality*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Cullinane, Michael. 2014. *Arenas of Conspiracy and Rebellion in the Late Nineteenth-Century Philippines: The Case of the April 1898 Uprising in Cebu*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Guerrero, Milagros C. 2015. *Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898–1902*. Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- Ileto, Reynaldo C. 2021. The Road to 1898: On American Empire and the Philippine Revolution. *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 49(3): 505–526.
- Mojares, Resil B. 2006. *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T. H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Richardson, Jim. 2013. *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892–1897*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 高木佑輔. 2018. 「研究展望 21世紀のフィリピン政治研究——構造から制度、制度から人、人から地域へ」『東南アジア——歴史と文化』47: 68–80.
- 平田晶子. 『ラオス山地民とラム歌謡——内戦を生き抜いた宗教・芸能実践の民族誌』風響社, 2023, 365p.
- 本書は、山地ラオにおけるラム歌謡をめぐる民族誌である。東南アジアの伝統音楽を知る人なら、インドネシアのガムランやクロンチョンと並んで、タイのルークトウンやモーラムの名は聞いたことがあるだろう。モーラムは竹製管楽器ケーンのリズムカルな旋律に合わせて歌う歌謡芸能で、タイではイサーン(東北部)を強く想起させる音楽ジャンルだ。しかし、本書が扱うのは、ラオス中部のオーストロアジア系、ソーの人びとのラム歌謡である。彼らにとって音楽とは何かを、音楽芸能、治療儀礼、精霊儀礼、オンライン音楽配信など多様な切り口から論じる。
- 著者は、2009年から2011年にかけて、ラオス人民民主共和国にて現地調査を実施し、その成果をまとめた博士論文をもとに執筆したのが本書である。興味深いことに、著者は、村落調査でケーン演奏家(モーケーン)とラム歌手(モーラム)の家に間借りをし、そこでケーンを習得して公演で舞台にも立ったことがあるという。旋律の紹介では五線譜への採譜も示され、豊かな音楽的造詣を背景にラム歌謡の過去と現在を描き出した秀作である。
- 本書の構成は以下の通りである。
- 第I部 オンライン状況下の在来音楽の民族誌